

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
ほー1	防已黄耆湯	<p>読み および解説・その他</p> <p>防已 (辛平) 1g・甘草 (甘平) 炒る0.5g・白朮 (苦温) 4g・黄耆 (甘微温) 3g 上の諸薬を麻の実の大きさに剉んで5gをすくい、その中に生姜を4切と大枣1枚と水を、盃(40ml)に一杯半、即ち60mlを入れて一杯の八分として、即ち32mlに煎じて滓を去り温服させる。やや暫くして再服する。</p>
<p>痿湿喝病脈証併治第二第22条 (金匱要略)</p>		
<p>「風湿脈浮にして身体重く、汗出でて悪風する者防已黄耆湯之を主る。」</p>		
<p>解説 湿が多い人が風にあたったために、風湿を病んで、脈が浮いていて、身体が重だるく、汗が出るために悪風する場合は、防已黄耆湯が主治する。</p>		
<p>防已黄耆湯は、湿の多い人や、水太りの人が風邪を受けて、汗が出たり、悪風、頭痛、発熱、身体が重だるい(特に足が重だるい)などの症状に用いる。また熱が無くても、湿が多い人で、汗が出易く、小便が少なく、足がむくみ易いという人の関節炎にも用いる。この場合、関節の発赤は無く、動かした時だけ痛いという人が多い。腫脹もブヨブヨした虚腫である。</p>		
<p>防已黄耆湯は、防已で水湿を抜き、白朮で心下の水を下し、黄耆で表虚を充実させる。</p>		
<p>防已黄耆湯加減方</p>		
<p>湿が多くなり過ぎて、胸に迫り咳などの呼吸器症状が現われた時は 防已黄耆湯 + 麻黄 0.5g とする。</p>		
<p>食欲不振や、腹痛や便秘を訴える場合は (この様な訴えは少ない) 防已黄耆湯 + 芍薬 0.75g とする。</p>		
<p>胃、心の陽気不足により、腎気が上衝し、のぼせ、動悸がある場合は 防已黄耆湯 + 桂枝 0.7g とする。</p>		
<p>冷えたり (特に下半身が)、風に当たったりすると、痛みが増す場合は 防已黄耆湯 + 細辛 0.5g とし、服用して後に、虫が皮膚の中で這う様な感じがするはずである。また腰から下の方が氷の様に冷たい場合には、蒲団の上に坐り、また衣服で腰から下をまとめて温かくして、少し汗をかかせてやれば癒える。</p>		
<p>防已黄耆湯証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「身体の節々等が痛み、重くてだるく、汗が出でて、ゾクゾクと寒気があり、口中燥く者、以上の場合大抵熱があり、普通の發表剤で癒えざる者に本方の之く所の者あり。或は全身むくみて重く、汗が出て寒気があり、小便が少き者、又は特に腰より下に水気ありて足が重く、小便が少き者、神経痛などと謂はるる者にて本方のゆく者あり。」と記されている。</p>		
<p>水気病脈証併治第十四第23条 (金匱要略)</p>		
<p>「風水、脈浮、身重く汗出でて悪風する者防已黄耆湯之を主る。腹痛する者は芍薬を加う。」</p>		
<p>解説 風水を病んで、脈は浮いて、身体が重くだるくて、汗が出て悪風する者は、防已黄耆湯が主治する。この場合、腹の痛む者には、芍薬を加える。</p>		
<p>防已黄耆湯 (外台)</p>		
<p>水気病脈証併治第十四第35条 (金匱要略)</p>		
<p>「外台防已黄耆湯は、風水、脈浮は表に在りと為し、其の人或は頭汗出で、表に他病なく、病者但重く、腰より以上は和となす。腰以下は当に腫れ陰に及ぶべし以て屈伸し難きを治す。」</p>		
<p>頭汗出で、但、当に、以て、屈伸し難き</p>		
<p>解説 外台の防已黄耆湯は、風水の病で、脈が浮いていて病が表に在り、頭に汗をかいている。表には、水気(風水)以外には病がなく、病人はただ下半身が重くだるく、腰から上は調和していて異常が無い、そして腰から下は腫れていて、それが陰部にまで及んで、そのために足が屈伸が出来ないものを治す。</p>		